



<新刊紹介> Peter Thonemann著 An Ancient Dream Manual : Artemidorus ' The Interpretation of Dreams (Oxford University Press、2020年1月刊、£20)

著者	藤井 崇
雑誌名	関学西洋史論集
号	44
ページ	51-53
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029435

〔新刊紹介〕

Peter Thonemann

*An Ancient Dream Manual :
Artemidorus' The Interpretation of Dreams*

(Oxford University Press, 2020 年 1 月刊、£20)

藤 井 崇

著者の Peter Thonemann (以下、トーネマン) は、現在、イギリスのオクスフォード大学古典学部ならびにワダム学寮に在籍する古代史教授で、専門は、ヘレニズム史、ローマ史、ギリシア語銘文学、古代貨幣学である。まだ 40 代前半の若さであるが、当該分野ですでに世界的名声を確立した、きわめて有能、多産な学者である。現代の EU を踏まえたヨーロッパ史概説シリーズのなかでの古代史の巻 (*The Birth of Classical Europe: A History from Troy to Augustine*, with Simon Price, 2010) を皮切りに、小アジアのマイアンドロス川流域の地域史を全体史的視野から分析した研究書 (*The Maeander Valley: A Historical Geography from Antiquity to Byzantium*, 2011)、ヘレニズム世界のダイナミズムを貨幣を用いて活写した一般書 (*The Hellenistic World: Using Coins as Sources*, 2015)、そして多数の王朝、大小の都市、多様な文化が入り乱れるヘレニズム世界を巧みな手法でコンパクトにまとめた一般書 (*The Hellenistic Age*, 2016) で、トーネマンは学界ならびに一般読者層できわめて高い評価を得てきた。本書との関連でいえば、重厚な研究を土台としながらも、分かりやすく素直な彼の文体は特筆すべきもので、これはトーネマンが話題の新刊書を論評する *Times Literary Supplement* の執筆陣の一人であることと無関係ではないだろう。

本書は、Oxford World's Classics の一冊として 2020 年に Martin Hammond に

よって翻訳された、アルテミドロスの *The Interpretation of Dreams*（邦訳では『夢判断の書』）の解説本である。本書の構成は以下の通りである。

第1章 蛇と鯨／第2章 アルテミドロスと『夢判断の書』／第3章 夢判断の方法／第4章 身体／第5章 セクシュアリティとジェンダー／第6章 自然界／第7章 夢に現れる都市／第8章 書物と文芸／第9章 神々／第10章 祭礼と競技／第11章 地位と価値観／第12章 見えない帝国／エピローグ 中世以降のアルテミドロス

さらに末尾には、章ごとの文献案内、『夢判断の書』の引用箇所一覧、そして索引が付されている。また上述の Hammond による『夢判断の書』の翻訳には、トーネマン自身による詳細な註が付されている。

アルテミドロスは、2世紀末から3世紀はじめのローマ帝国を生きた小アジア出身のギリシア人で、5巻からなる『夢判断の書』を著した。これは、古典古代の夢と夢判断の実態を伝える、唯一現存する書物で、特に性に関する夢の解釈について、フロイトやフーコーが大きな関心を寄せたことで知られている。本書は、この『夢判断の書』を同時代の社会、文化、宗教に位置づけながら、当時の人々の希望と不安、そしてその前提となった彼らの価値観——例えば、身体と自然の捉え方、ジェンダー観、都市生活と帝国のあり方、祝祭と宗教——を読み解いている。この意味で、本書は『夢判断の書』の単なる解説本という立場を超えて、ローマ帝国に生きた人々の等身大の姿を生き生きと描く独自の価値を持つ好著となっている。評者の関心を引いた点は数多いが、若干の例を取り上げるならば、アルテミドロスが主として庶民や奴隷のために夢判断をおこなったこと（したがって、『夢判断の書』は通例の史料にはほとんど残されない庶民、奴隷の声の宝庫となっている）、アルテミドロスの歴史、文芸、自然学の知識がまったく不完全だったこと（多くの場合、エリートの偉人だけがテーマになる古代史では非常に貴重な特性）、アルテミドロスがラテン文化をギリシア文化とまったく異質なものと捉えローマ皇帝にもほとんど言及

していないこと（概説書で強調されるローマ帝国の臣民への影響力の強さが疑わしくなる）、が特に興味深かった。また、フロイトとフーコーが関心を抱いた『夢判断の書』におけるセクシュアリティの問題についても、トーマスは十分な紙幅を費やしており、性交の相手や性交において挿入する側の社会的立場が重視される当時の価値観を詳しく論じている。刊行されて間もないため、専門家による書評はまだ少ないが、例えば、Edith Hall（ロンドン大学教授）は、きわめて雑多な内容からなるアルテミドロスの夢判断を、身体・自然観、ジェンダー観などの重要なテーマにまとめあげたトーマスの構想力を高く評価し、本書が学界の外の読者にたいし大きくアピールするものと賞賛している。

アルテミドロスの『夢判断の書』は、すでに1994年に邦訳（城江良和訳）がなされているが、一般読者層になじみ深い作品とは到底いえない。しかし、近年相次いで刊行された書籍によって、『夢判断の書』の世界は実はわたしたちに身近なものになりつつある。ローマ帝国に生きた非エリートの実態に迫ったロバート・クナップ著（西村昌洋監訳、増永理考・山下孝輔訳）『古代ローマの庶民たち：歴史からこぼれ落ちた人々の生活』（白水社、2015）では、庶民の心性を読み解く格好の史料として『夢判断の書』が多用されているし、ローマ帝国ギリシア語圏の偉大なる知識人の一人ガレノスを扱ったスーザン・マターン著（澤井直訳）『ガレノス：西洋医学を支配したローマ帝国の医師』（白水社、2017）では、アルテミドロスと直接関係する夢による治癒の様子が描かれると同時に、ガレノスやアルテミドロスの活躍の舞台だったローマ帝国ギリシア語圏の政治、社会、文化のあり方が分析されているのである。本書は、こうした翻訳書と響きあいながら、アルテミドロス『夢判断の書』というきわめて独自の価値を持つ史料を通じて、ローマ帝国の庶民の世界とローマ帝国ギリシア語圏の世界へとわたしたちを誘う、非常に優れた書物である。